

令和5年度 幼児教育研修（年齢別担任研修 2歳児・第3回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

日時：令和5年11月22日（水）15:00～17:00

会場：足立区勤労福祉会館

講師：東京未来大学 非常勤講師 小野崎 佳代 氏



## 子どもにとって遊びは生きることそのもの

- 子どもが ◆何に興味をもっているのか
- ◆どんなイメージをもって遊んでいるのか
- ◆どんな願いをもっているのか

表情、行動などで表される  
**非言語メッセージ**からも  
子どもの思いや願いを汲みとる

をよく見る

大人が発達を理解し

子どもが「やってみたい」と思う環境  
子どものイメージが実現する環境

をつくる



遊びは発達の原動力  
～遊びは学び～



自分の求めや願いを実現していく過程の中で、充実感や達成感を味わい、自己肯定感や自信を獲得していきます。子どもの遊びにとって最も大切に育まなければならないものは**自発性**です。今、その子がやろうとしていること自体がその子にとって必要であり、意味があることです。

## 夢中になって遊ぶ中で…

生涯に渡って主体的に生きる力の基礎を養う

自分らしさが育つ

身体感覚を伴う経験をすることにより、**豊かな感性、好奇心、探求心、思考力、集中力**が培われる

自己コントロールや粘り強さ、協働して取り組む力、コミュニケーション力などの**非認知能力**が培われる

その後の生活や学びの基礎となる

子どもは  
自らの経験から学ぶ  
まねっこして学ぶ  
遊びを通して学ぶ

子どもは有能な学び手・遊びこそ豊かな学び

今を充実させながら未来を生きる力を育む



## 探索活動はなぜ大切？

自分の内的な求めに従って行動できる喜びは、遊びだす力につながる



なんだろう？

おもしろい！

学びの芽生え



発見の喜び、感動は、まわりのものへの知的好奇心や興味・関心を高める

主体的に世界にかかわることができるようになる

その後の知的発達の土台となる

「センス・オブ・ワンダー」

（自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性）

葉を踏みしめる音、水の冷たさなど  
心を動かす体験が感性を豊かにする



子どもが主体的に周囲の人やものに興味をもち、直接関わっていきこうとする姿は、「学びの芽生え」であり、生涯の学びの出発点に結びついていくものです。

『知ることは感じることの半分も重要ではない』レイチェル・カーソン



## 保育の振り返り

子どもの姿が変容してきた過程やその子らしさ

### 「生活や遊びを通して、一人一人にどのような育ちが見られたか」

という視点でプロセス全体を振り返る

1

#### 遊びの充実、環境構成はどうだったか

自発的に遊べる環境だったか。また、遊びの中で自分を出すことが心地よい経験となるように支えられたか。

2

#### 主体としての子どもの思いを受け止め、適切な援助ができたか

これまで築かれた保育者との関係（信頼関係）が、友達への関心・関係へと広がっていくよう援助できたか。

3

#### 養護（主に生活面の援助）を通して信頼関係と意欲を高めたか

安心できる保育者との関係の下で、基本的な生活習慣が身についていくよう、気持ちよく生活する経験を支えながら、自分でしようとする意欲を育めたか。



4

#### 保護者との共育ができたか

子どもの育ちを発信し、成長の喜びを共有できたか。

クラスだよりやドキュメンテーションなどを活用して伝えるように発信する



## 安心の基地としての保育者の存在

安心して要求を出せる

甘え・依存しながら、人と  
かかわる喜びを体験する

→自己主張をたっぷりと

愛着の対象（保育者）が安心・  
安全の基地（心の拠り所）になる

→人への基本的信頼感を獲得する



→困難や葛藤に出会った時、  
立ち直る力、挑戦する力になる



「自分でしたい気持ち」と「自分でできること」の間で揺れる気持ち（かんしゃく・だだこね）を受け止める、支えることが大切です。子どもの気持ちを言葉にし、**子ども自身が決められるように**援助しましょう。

友達とのトラブルなど負の体験を、信頼している大人に支えられ、共感してもらうことで徐々に切り替える力が育ちます。「～したかったのね」「～が嫌だったのね」という**受容・共感**と、**保育者の思いを伝える丁寧な対応**が第二の自我へとつながります。

保育の専門職として、自分の振る舞いを意識することが大切



肯定的な言葉がけを考えてみよう

「ごちそうさましないで、席を立っちゃダメ」



「子どもの傍らにいる人は、子どもを傷つけることだけはしないでください」

灰谷健次郎



## 研修生の受講報告書より

夢中になって遊ぶ中で、「学びの芽生え」や「自分らしさ」が育つということを学び、遊びが生活の中心である保育園において、子どもと関わる保育者の役割がどれほど重要であるかを改めて感じた。「この世界にはこんなにすてきなことがある!やってみよう!不思議!」をたくさん感じられるよう、自身もアンテナを張り、感性を磨いていきたい。

子どもが何かを達成した時や、できた!と感じている時に、その気持ちを受け止めようとして、必要以上に声かけしていたことに気づいた。子どもは、大人に褒められることではなく、自分ができたことに対して純粋に喜んでいるのだとわかり学びになった。できた喜びを受け止めることはもちろんのこと、その子自身が何を求めているのかに視点をおいて保育することを意識していきたい。

ワークの回答例:「ごちそうさましてから席を立とうね」